

る。そのため、講座の水準・成果や運営の豊かさなどの点で希少な成功事例として、全国から見学や講演の依頼が繰り返されている。当面は上記活動に関わりながら、今後は大学所在の品川区における社会教育活動にも参与することを考えたい。

所属学会に関しては日本認知科学会の運営委員を務めているほか、30人規模の認知科学に関する自主的研究会の主査を務めており、先端研究者の報告と議論や若手研究者への助言・指導を目的として、月1回の研究会を開催運営している。

荻島 史子

(人文科学研究所教授)

必修である体育実技の指導を三十五年以上にわたり、休まずに続けてこれたことを自分自身の健康に感謝するとともに高く評価したいと思う。

その間、清泉女子大学の学生（その時代の若者の運動能力の底辺を支えているレベル）に、何とか身体を動かす楽しみを知ってもらい、身体を動かす習慣を身につけてもらいたいと、授業を工夫・改良してきた。

カリキュラムは、社会人になってから生活の中に組み込める様な内容に気を配ってきた。学問することや運動すること等が楽しいと思えるのは、ある程度基本になることが理解でき、その一点を達成すべく努力し、向上しないと、次にあるもっと大きな楽しみを知ることが出来ないし、楽しむことも出来ないの、「何が基本になっているのか?」「何が身に付けば楽しいか?」その点を追求し続けている昨今である。

論文1：清泉女子大学紀要

『テニスのフォアハンドストロークの指導に関しての一考察』

講演：土曜自由大学 「練習する心」

さらに、健康科学の講座において、一学年学生全員に自分自身の身体を合理的に管理し、運営しなければ、この便利になり過ぎてボタン一つで身体を動かすことのない、さらに物に恵まれすぎた飽食の時代を賢く生き抜けないことを実技と同時に講義によっても指導をし強調したいと思っている。

家族の単位が小さくなり、祖母や親からの情報が少なくなっている今、親代わり、祖母代わりとして口や

かましく、“おはようございます” “ありがとう” と挨拶することから何をどう料理して食事に取り入れるべきかなど生活に関連する情報を多く取り入れる様工夫し実践している。

論文2：清泉女子大学紀要

『清泉女子大学学生の食生活に関する実態』

講演：土曜自由大学

「自分のからだは自分でつくり管理する」

この頃体育実技の際に最も強調している事は、“先生の話聞きなさい。聞かないでボーッとしていると怪我をするよ”である。今時の若者はとにかく人の話を聞かない習慣がついてしまっている。彼等のためにもどうしてもその悪い習慣から抜け出してもらいたいと思い、授業の中で何回も何回もそういう場面をつくり上げて繰り返している。

「体育実技」と「健康科学」を必修にしている清泉女子大学を誇りに思い、出来るだけ多くの学生と接触を図り、前述のことを努力することが任務であると思っている。

平成五年から始まった社会に開かれた大学、ラファエラ・アカデミアにおいて、六十歳以上のテニスのレッスンを宮前平で行っている。卒業のない大学なので生徒との絆は実に強いものがあり、新しい楽しみになっている。平成十五年には百七十人のテニスの参加を見ている。今年、神奈川県女子テニス連盟の機関誌にこのレッスンの様子と考え方を記載し、神奈川県中の女子のテニスプレーヤーに読まれて、面白そうなのが宮前平の山の上でおなわれているらしいと清泉ラファエラ・アカデミアは一躍有名になった。

これからは、ボタンの押し方一つであらゆる知識を得ることができる時代を迎えようとしている。学校では、何をしなければならないかと考えると、体育実技の役割は実に大きいし、見直されなければならない課目になるのではないかと思われる。したがって、学生が参加して面白いと思う課目を増やし、充実させたものだと思うとともに、責任の重さを身にしみて感じている。

平沼 孝之

(人文科学研究所教授)

1. 研究活動

(1) イギリスの詩人彫刻師、William Blake (1757-1827) の「詩」と「デザイン」の複合芸術の研究。いわゆる彩色印刷術に拠る Blake の諸作品は、その表現方法上の独自性、その負っている詩的伝統、図像学的伝統からも究明される必要があり、またアンティノミアン神学と想像の問題を筆頭に 18 世紀の多岐にわたる思想・文化脈絡、西洋精神史の「地下水脈」からのアプローチも必要になる。Blake 芸術の現代性も視野に入れ、多様で多元的な課題を抱えながら研究のまとめをはかっている。並行して Alexander Gilchrist, *The Life of Blake* (1863) の翻訳・注解の仕事、今日に伝わる「Blake 神話」の発生過程を究明する仕事に当たっている。

Blake 研究に帰着した私自身の研究の来歴は、イギリス・ロマン派研究というよりは、Edmund Spenser-John Milton-Blake-W・B・Yeats へと系譜づけられるイギリス詩伝統の中核に常にかかわりながら研究課題を見出してきたものである。

(2) 物語研究。イギリス文学研究を進める過程で、文学の原点を考える必要から、本学人文科学研究所の研究課題として追及してきた。戦後の物語論の急展開に触発されながら、とくに「食」と「知」のモチーフを中心に研究している。本研究所の『清泉文苑』(第 13 号) の特集「ポストコロニアリズム」所収の『食人種』言説のパラドックス——ポストコロニアル状況におけるロビンソン・クルーソー」等もその研究の一環。近刊予定の口承寓話の包括的な比較研究として知られる David E. Bynum, *Daemon in the Wood—A Study of Oral Narrative Patterns* (Harvard Univ. Press, 1978) の翻訳(法政大学出版部)、平成 9 年刊の岩波文庫『アルハンブラ物語』上下 Washington Irving, *The Alhambra* (1832,1852) の翻訳もこの研究過程から生まれたものだが、現在、Lewis Carroll の物語作法に関する著書を準備している。

2. 教育活動

上記研究は (1) は英語英文科の英文学特殊講義 1 に、(2) は一般教養科目「文学 a、b」に反映されている。(1) の講義は平成 10 年にロマン派詩学、11-12

年に Lewis Carroll 研究、13 年に Spenser-Milton-Blake の文学系譜、14-15 年に Blake 研究として展開している。イギリス文学の研究にかかわる基本的知識とともに、常に研究の最前線を伝える授業を心掛けている。(2) の講義は、物語伝達における口承伝承・物語の場の生成の論理・物語文法の諸相・物語と精神分析理論・物語論の理論的展開等を組み合わせ、多様な素材を渉猟しながら、物語論 (Narratology) の概略を伝える講義である。

諸学授業は「中級英語」と「上級英語」の講読を担当。前者では英語学習の基礎能力の総合的な捉え直しと実力養成を目指し、英語文の基本パターンに習熟する授業、後者では前者を前提に英文講読を通じて知識獲得と思考力の養成に力点をおき、思考力を刺激する教材を選ぶようにしている。

本学では早い時期から一年次生の「人間論」科目には意欲的にかかわってきたつもりだが、とくに近年は当科目に限らず大学への「導入」(初年次教育)教育の重要性は無視できない。それは担当科目全般に適宜活かされる必要があるともいえるものであり、さらに意欲的に取り組みたいと念願している。

3. 管理運営活動

(1) 図書委員会委員(平成 10-15 年)研究図書の整備と並行してデータベース等の備え、他図書館との連携の充実が必要であり、限られた図書予算の配分等に若干の問題はあるものの、全体的に適切な運営がなされていると思われる。

(2) 教育体制検討委員会委員(平成 13-15 年)とくに共通教養教育と語学教育のあり方、また「導入教育」の必要性、「教養学科構想」、また「自由コース制」について、カリキュラム編成の問題についての提案、補助的役割、討議に参加。文書として「2002 年度大学の教育・授業を考えるワークショップ」[7 月 31 日-8 月 2 日、於グランドホテル浜松]報告書

(3) 人文科学研究所運営委員会委員(平成 10-15 年)土曜自由大学の運営司会、『清泉文苑』の編集等。本学人文科学研究所の草創期を知る者として、間領域的研究にかかわる交流の場が活性化することに精一杯寄与したいと念願している。

(4) 言語教育研究所運営委員会(平成 14-15 年)本研究所は現実問題として、旧「外国語過程」の業務

を果たしている。本学のカリキュラムにかかわる短・中期的な展望を築きつつ不断に生じる現実問題の適切な処理に当たる組織は必要であり、その業務と内実に相応しい名称は、「外国語（教育）センター」のそれであろうか。

(5) 広報企画委員会（平成 13-14 年）とくに記述することはないが、今後は (3) の活動等を通じて協力することになるだろう。

4. 社会的活動

組織にかかわる活動：

本学ラファエラ・アカデミア講師（「William Blake 入門」）

『青銅時代』（冥草舎）編集長

日本英文学会、日本シェイクスピア協会、日本イェイツ協会

十七世紀英文学会会員

その他

廣部 千恵子

（人文科学研究所教授）

1. 研究活動

(1) 本学がカトリック大学であるので、自分の専門としていた生薬の理解（漢方）を広げて、中東特に聖書の地の植物に対する研究を続けて来た。その成果は、清泉女子大学紀要に「聖書の植物の姿と効用」の題で 10 回に渡って発表してきた。この論文を書く為に、30 回近くイスラエルおよび周辺国を調査し、この時の写真と説明が協力者の Ori Fragman との共著でミルトス社から『イスラエル花図鑑』として出版されている。なお、清泉女子大学紀要連載の論文に少し手を加えたものが、教文館から『新聖書植物図鑑』として出版されている。聖書の植物を始めた動機は、聖書本文にあった。エゼキエル書 47：12 に、「神殿から流れ出る川のほとり、その岸には、こちら側にもあちら側にも、あらゆる果実が大きくなり、葉は枯れず、果

実は絶えることなく、月ごとに実をつける。水が聖所から流れ出るからである。その果実は食用となり、葉は薬用となる。」という記載にある。この葉の薬用については次ぎの (2) で述べる。聖書の植物の研究は、聖書のバックグラウンドの研究、ヘブライ語聖書の研究へと発展し、現在詩編をヘブライ語で読む会も主催している。

(2) (1) で述べた聖書の言葉に関連して、10 年位に渡ってイスラエルとその周辺の薬草の抗腫瘍活性を調査した。もともと日本および中国の生薬の研究を行い、その成果を『日本東洋医学会雑誌』などに投稿していた。また国外雑誌には「A Method for the Chemical Evaluation of a Therapeutic Compound in Crude Drugs Used in the Formula of Oriental Medicine」Acta Horticulturae No.344,1993, pp.194-204 などに投稿した。また漢方については 3 冊の本を出版し、最近のものはメディカルニューコンから『暮しの漢方講座』として出版されている。中東の調査をはじめてからは、研究対象はイスラエルの植物の抗腫瘍活性についてに変化した。そして数種の活性を示す物質を見出し、その中からクマツヅラ科のセイヨウニンジンボク *Vitex agnus-castus* について詳細な実験を行った。構造研究の結果 4 種の新しいフラボノイドと既知のフラボノイドを検出した。この結果は、1、Screening Test for Antitumor Activity of Crude Drugs 4, Studies on Cytotoxic Activity of Israeli Medicinal Plants(Natural Medicine Vol. 48, No 2, 1994, pp.168-170)および Cytotoxic Principles from *Vitex Agnus-castus*(Phytochemistry Vol46, No3,pp. 521-524)に共著として発表してある。セイヨウニンジンボクについてはさらに人の培養細胞を使用してその抗癌性も認めている。このことについては『日本産科婦人科学会雑誌』第 52 巻、第 10 号 1449-1456 頁に「セイヨウニンジンボク(*Vitex agnus-castus*)抽出物のヒト培養子宮頸管線維芽細胞、卵巣癌細胞および乳癌細胞に対する増殖抑制作用」として発表しているし、その後も Cytotoxic Effects of *Vitex angus-cautus* Fruit Extract Against Human Cultured Uterine Cervical Fibroblast, Breast Cancer and Ovarian Cancer Cells, and its Biochemical Mechanism Acta Hort. 597 ISHS 2003, pp.167-176 や Cytotoxicity and Apototic Inducibility of *Vitex agnus -castus* Fruit Extract in Culture Human Normal and Cancer Cells and Effect on Growth Biol. Pharm. Bull 26(1), 2003, pp. 10-18 に共著として発表している。その他にも聖書のヒソブの成分研究などもある。C

ytotoxic Principles from Majorana syriaca 共著 *Natural Medicin* 52(1) pp74-77 がある。

現在は、中東地区の政情不安のため、オーストラリアに研究の対象を移し、レモンマートル *Backhousia citriodora* やニュージーランドのマスカ *Leptospermum scoparium* について研究を行うと同時に南アメリカ、アマゾン流域のスクピーラや紫イペなどについても研究を行っている。一部は既にバイディジタル・Oリングテスト医学会の講演会でも発表している。スクピーラ *Bowdichia nitida* は、神経系の病に対する効果が証明され始め、パーキンソン病への効果も追試中である。

(1) BI-Digital O-Ring Test の利用については、医師、歯科医師等と協力して、廣部の研究した生薬を臨床に応用できるかを確かめている。実際に使用しているのは、セイヨウニンジンボク、レモンマートル、紫イペ、マスカハニー、スクピーラなどである。これらを応用した発表は、*International Symposium on the Bi-Digital O-Ring Test* などで行われているし、*Acupuncture & Electro-Therapeutics Research*, Vol. 27, No.3/4 2002, pp250-251 その他にも数多く発表している。

(2) 化学教育についても、日本化学会に「女子大・生活科学実習の課題研究」の題で本大学での化学教育のあり方を研究し、数多くの発表をしている。この一連の研究に対しては、文部省科学研究費の援助のもとに行われた。具体的なテーマとしては、「女子大・生活科学実習の課題研究：TLCを用いた嗜好飲料中のカフェインの分析実習」、「女子大・生活科学実習の課題研究：昇華法による茶葉からのカフェインの捕集と定性反応およびTLCによる同定」、「女子大・生活科学実習の課題研究 3:ジアゾカップリング反応を利用した着色料と発色剤に関する実験」、「女子大・生活科学実習の課題研究 4: 錯イオンの化学と植物染色」、「女子大・生活科学実習の課題研究 5: 植物色素の可視部吸収スペクトルと植物染色」、「女子大・生活科学実習の課題研究 6: ログウッドを用いる植物染色」、「女子大・生活科学実習の課題研究 6: RQ フレックスを用いるビタミンCの定量」、女子大・生活科学実習の課題研究 7: 『化学』から『暮らしの化学 a 及び b』への変更、「女子大・生活科学実習の課題研究-8 スポンジ又はガラスウールとヘヤードライヤーを用いる植物染色」などの発表と論文である。

以上の分野でバラバラな研究を行って来たように思われるかもしれないが、化学教育については一応の区切りが科研費の援助によってでき上がり、現在は授業

に対する工夫は続けているが、研究の方は行っていない。残りの(1)~(3)の分野ではなお研究が続けられ、しかも(2)と(3)は健康の為に一つのものとなりつつある。

2. 教育活動

学生に対する教育活動は、廣部の場合研究活動にともない改良されて来た。

『暮らしの科学 I』においては、日本化学会化学教育部に発表したようなものをさらに改良した授業を学生の要望に応じて行っている。化学、物理現象というものは実際の暮らしの中にもかなり入りこんでいる。そのようなことは中学や高校でも説明されているのだが、授業中心、受験勉強用授業などの影響でなかなか興味をもって勉強するには至っていない。ことに本大学は文系の大学であるので、大半の学生は化学・物理などを苦手としている。このような学生対象に『生活科学実習書』を出版して使用していた時もあったが、内容を随時変えられるように現在はプリントを使用している。

『暮らしの科学 II』では、漢方薬の家庭に於ける使い方、民間薬、健康を維持するためのツボ、その他の健康法を行っている。この民間薬の部門にさらに廣部が現在研究中の薬草についても説明していきたいと思っている。本学には現在栄養学のように食生活に必要な知識を与える学問が置かれていないので、折に触れて健康維持のためのアドバイスも行っていきたいと思っている。廣部が出版した『暮らしの漢方講座』を教科書として使用している。

『聖書と自然』は文化史の一般開講科目として置かれている。聖書の背景の調査は、廣部がもっとも力を入れたテーマである。この授業では廣部が30回近くに及ぶ聖書の地の調査の際撮影した写真やビデオを教材として殆どがデジタル化してある。これを使用することによって教室にいながら聖書の地を訪ねる気分になれるように工夫している。授業の優劣はないが、廣部の担当している授業のうちで一番準備に時間がかかった授業であり、多分日本でこのような授業は清泉女子大学だけであろうと思う。清泉女子大学はカトリック系の大学であり、キリスト教、聖書学などの科目がある。これらの理解には聖書の地の地形、気候、動植物などの理解が大変重要である。この理由でも廣部はこの科目に力を入れている。教科書には使用していないが参考図書として廣部の教文館から出版した『新聖書植物図鑑』を指定している。

廣部は前年度まで文化史学科に所属していたので、この聖書のバックグラウンドを研究する『植物誌演習』、『研究法演習』も今年度まで担当している。2004年度からはこの演習科目は無くなるが、『聖書と自然』は引き続き担当する予定である。どの科目を担当するにしても、廣部の場合は研究と授業の間のギャップはあまり存在しないし、最近の研究動向などを話すと学生が大変興味を示すことは事実である。これからもそのように行っていきたいと思っている。

3. 管理運営活動

廣部自身はあまり管理能力がないし、あまり好きではない。しかし決められた委員会の仕事は普通に行っているつもりである。強いて言えば宗教活動委員長として、清泉女子大の宗教的行事を行って来た。本年度からはカトリックセンター長として活動する予定である。

清泉女子大学は、カトリック精神でつくられた大学であるので、こういう活動は廣部自身としてもできるだけして行きたいと思っている。

4. 社会的活動

薬草の研究を生かすために所属している日本バイオデジタル・O・リング医学会の方と共同で難病の方の治療の手伝いを行っている。日本には沢山の方が治らない病気のために苦しんでいる。このような方を精神的に支え、かつ廣部があらゆる分野で習得した技術を提供することによって難病治療チームの仕事をボランティアで支えている。

すでにアメリカ、イギリス、オーストラリアなどでは医師、歯科医師、薬剤師、物理療法師、看護師などがチームをつくることによってより良い医療を心がけている。私はそのようなチームの中で代替医療の手伝いが出来れば幸せであると思っている。

米田 彰男

(キリスト教文化研究所助教授)

1980年代の10年間、カナダとスイスで過ごしたが、

留学生生活を始めて、うんざりしたことの一つに「自己評価」がある。やたらと自己評価を強いられた経験がある。何故うんざりしたのか？こうした発想は日本人的ではないからなのか、それとも我が怠慢からくるものなのか。今回も書きたくないのだが、あえて自己評価なるものを批判しつつ、自己批判を試みよう。実は、

(1) こうした逆説的反抗の姿勢こそ、私の研究対象であるイエスの生の本質をなすものである。そもそも教育に携わる者に対する評価というものは、生徒や学生がおのずからに与えるものであって、自分で自分を評価して、それを文部科学省に提出してどうなるというものではない。「ニワトリには三本足がある」と、いにしへの賢者が語っているが、我々はニワトリの三本目の足、即ち観念でものを考える幻想の世界からもうそろそろ脱出せねばならぬ。また、文部科学省が自己評価を要求する、その権威の構造に問題はないか？フリップル大学の我が師ボヘンスキーの名著に《Was ist Autorität?》があるが、上に立つ者は権威の使用に十分注意せねばならぬ。世には権威の誤用が横行しているからだ。何故こんなことを書くかという、これこそまさに我が学問分野だからだ。(1)「人間とは何ぞや?」「権威とは何か?」「イエスとは誰か?」こうした問いかけこそ私の研究領域である。ちなみに故ボヘンスキー教授は『哲学思索の道』や『現代のヨーロッパ哲学』(岩波)等で知られる哲学者であるが、東京工大などに弟子を持つ論理数学者でもあり、かつまた23か国語をこなす語学の達人でもあった。そして70歳でパイロットの資格を取り自由に空を飛んだ柔軟な発想とユーモアの持ち主でもあった。こうした教育者との出会いを有り難く思う。(1) 一期一会の出会い、具体的な一つ一つの出来事の大切さを探究することもまた私の重要な研究目標である。マルコ福音書とはまさに既成概念や称号でイエスを理解するのではなく、一生を通しての一つ一つの出来事の集積でイエスを描こうとした試みである。自己評価もさることながら、「偏差値」というシステムも再考を必要としているのではなからうか。数値で処理する、このこと自体が夢多き若者の心をどんなに傷つけてきたか、この単純な事実到我々教育者は自己批判の目を向けねばならない。システムそのものに矛盾があるとき、一度確定し、いわば常識となっているシステムを変革することの難しさ、私の学問対象であるイエスは、当時ユダヤの社会をがんじがらめに縛っていた規律に反抗し、掟破りの人生を遂げた。それ故、人々から「大飯食らいの大酒飲み、徴税人や罪人の仲間」と言ってはやしたてられた。人間として当然正しいことは何か、イエスにとって大事